

中 国 雑 感

所長 濱 崎 健 輔

昨年、の自転車生産台数3,190万台という世界一の自転車生産国は、どんな環境でそれが達成されているのであろうかと、大変興味を持っていた。幸い今年3月、八神氏（自転車貿易センター副理事長）を団長とする訪中団の一員として、北京と上海を訪れる機会に恵まれた。そこで上海の幾つかの自転車会社での感じたままを述べてみたい。

まず中国で驚いたことは、自転車工場の従業員の多さである。人口11億人とは聞いていたが、一企業の従業員が7,000名とか8,000名であると工場概況説明で紹介されると、一瞬聞き間違えたのではないかと自分の耳を疑ったほどである。もちろん、生産体制が日本と異なり、一貫生産方式であるが、それにしてもその多さに逆に感心してしまう。工場内は確かに大勢の人達が働いていたが、デスクワークの人達はあまり忙しくないようにも見受けられた。また、女性のエレベーター操作員がいて、単調な仕事を行っていたが、いささか奇異に感じた。工場長は従業員に等しく仕事を与えねばならないという苦勞があるようであった。

ところで中国の自転車生産に携わる労働人口は32万人とのことであるので、一人当たり年間約100台の生産台数ということになる。ちなみに日本は約1,000台で、一桁の差がある。いかに労働コストが低いとはいえ、世界マーケットを視野に置いているならば、配置転換や新規事業など労働力の効率化、集約化を計る努力をして競争力を高める心が必要であろう。

第二は、このところ中国では自転車においても、消費者がモノを選択して購入するようになってきたといわれるが、製品が売れないのは企業側の責任ではなく、ユーザ側の責任だといった不思議な考え方が存在するよう

ある。これは台湾製の自転車が中国製より多く日本に輸出されている現状について、なぜそのようになっているのか、品質や価格の差といった面が理解できていないようにも感じられる。工場内での半製品のぞんざいな取り扱い扱いは、品質面でも工程面でも問題を生じる原因となるにもかかわらず、そうした注意がおろそかであるように感じた。昨年、台湾の自転車工場を訪問したが、塗装したフレームを引きずるといった無神経な場面には一度も遭遇したことはなかった。

なぜ、少しでも使う立場にたつてモノ造りができないのであろうか。フレームに欠品なく部品・ねじ等が組み付けられた単に自転車であれば良いという考えのようにも受け取れ、外貨を稼ぐための自転車としては一層のレベルアップが必要だと感じた。全従業員に対し、こうした考え方を是正しQCに対する意識高揚をはかるには、相当な時間と努力が必要ではないかと思った。

最後に、新鋭設備、特に雰囲気熱処理炉の設置が目につき、驚きを新たにしたが、熱処理の重要性が認識されてきたことは大変結構な傾向といえる。しかし、電気やインフラ整備は果たして大丈夫なのかと思った。工場内は節電のため、必要と思われる塗装の現場でも非常に暗かったり、夜来の激しい雨のため排水が悪く建屋に歩いて行けないこともあった。

短期間の訪問であり、自分の視野が狭く間違った受け止め方をしている部分や体制の違いといったこともあると思うが、いずれにしても、中国業界人の自転車技術に対する熱い欲求を満たすため、均衡ある堅実な技術協力を計画的に実施することが、両国の自転車産業発展のために必要であると痛感した。